

女神なんてお断りですつ。

3

## シェリス

「森の賢者」と呼ばれるハイエルフ。冒險者ギルドのマスターでもある。ティアを前世から知っており、何かと助けてくれる。

### リジット

伯爵家の家令。  
有能すぎるほど有能だが、  
実は大きな秘密を抱えているらしく——？

### ゲイル

ルクスの父で、  
凄腕の冒險者。ティアの  
祖父ゼノスバートとは  
少年時代からの親友。

### クロノス

伯爵家の護衛。  
最強の女騎士アリアの子孫。  
三人の弟妹と共に  
伯爵家に仕えている。

### エルヴァスト

第二王子で、ベリアローズの  
友人。王太子の身代わりとして、  
国の重鎮達に利用されている。

### マティ

伝説の魔獣ディストレア。  
ティアの魔術で  
体のサイズと毛色を変え、  
子犬のふりをしている。

### ベリアローズ

ティアの兄。以前はひ弱で偏屈  
だったものの、ティアの特訓に  
より心身ともに強くなった。

### ルクス

ティアの護衛。過保護で  
苦労性な性格。自由奔放  
すぎるティアに呆れつつも、  
根気よく付き合っている。

### ティア

『女神の力』を持つ伯爵令嬢。  
前世では革命を起こし、若くして  
亡くなった。転生時に神から  
世直しを頼まれたが、  
今回の人生は自由に生きようと  
決めている。

## 登場人物 紹介

## 目次

第一章	女神は退屈を厭う	
第二章	女神は天を睨む	
第三章	女神は試練を与える	
第四章	女神は舞台に舞い降りて	
第五章	女神は迎え撃つ	
第六章	女神は罪を赦さない	
終 章	女神は午後の光の中で笑う	

275 247 207 147 90 61 7

## 第一章 女神は退屈を厭う

フリー・デル王国ヒュースリー伯爵領の領都、サルバ。

その街から馬で東へ三十分ほど行ったところには、森が広がっている。それほど強い魔物はいないものの、戦う術すべを持たない者には少々危険な場所だ。

太陽が中天に差しかかる頃、その森の奥で一人の女性が薬草を採っていた。

「いい感じに育ってるじゃん。やっぱり新鮮なのが一番！」

嬉しそうに薬草を摘み採つては、アイテムボックスと呼ばれる鞄かばんに入れしていく。そこらの店で売つている薬草よりも新鮮でいいのが手に入つたと、ご満悦だつた。

彼女の名はティアラール・ヒュースリー。家族や友人からはティアと呼ばれている。

見た目は二十歳くらいで、目鼻立ちの整つた美女だ。少々癖くせのある長い髪は、後ろで一つに束ねて前に垂らしている。

しかし、これは本来の姿ではない。【時回廊】ときがいろうという神属性の魔術によって一時的に成長した姿なのだ。

もうすぐ七歳になる彼女は、この世界に存在する七つの魔力属性——風・水・火・土・闇・光・

神の全てを持っている。

七つの属性の中でも神属性は特に珍しく、持っているのは世界中でほんの数人だろう。それだけでなく、ティアは魔力の量に関しても、人族としてはあり得ない数値を示していた。

ティアが、こんな無茶苦茶なステータスを持つている理由。それには彼女の前世あかが深く関わっている。

今から五百五十年前、この場所にあつたバトラール王国という国。その国を滅ぼした第四王女サテイアこそが、ティアの前世なのだった。

サテイアは死後、『断罪の女神』として人々に崇められた。長い年月をかけて祈りを捧げられた結果、彼女は神格化されてしまったのだ。

そして膨大な魔力と反則級の能力を持って、同じ世界に転生したのである。しかも神から『世界を平和に導いてほしい』という、面倒な使命を与えられて。

「夜だと花が閉じてるから、採つても使い物にならないんだよね。過保護なルクスが遠出はダメって言うから、昼間もこの森には来られなかつたし……。お父様あ、ナイス出張！」

昨日の朝、領主である父のフィスタークが隣街の視察に出かけていった。ティアの護衛兼保護者役であるルクス・カラムも、それについていったのだ。

これ幸いと、ティアは屋敷を飛び出し、薬草採取にやつってきた。とはいえ、優秀な家令のリジットにだけは隠し事ができないので、正直に出かけてくると言つてある。

「リジットなら、お母様に私の事を聞かれても、上手く誤魔化ごまかしてくれるよね」

そう言つて、ティアは満足げに微笑んだ。

それからしばらく、また薬草採取に集中する。しかし、そこでいつもよりも大きい自分の手を確認して、不意に動きを止めた。

「森に入つて三十分経つけど……まだ余裕だなあ。ちよつと前まで、この姿でいられるのは二十分が限界だつたのに……また魔力が増えてるのかな」

姿を変える魔術は、魔力をかなり消費する。元々膨大な魔力を持つているティアでも、二十分が限度だったのだ。

しかし、今日は姿を変えてから既に三十分が経過している。その上、術が解ける気配もなかつた。「ギルドカード……見るの怖いな……うん。気にしないでおこう」

体力や魔力などが数値化して記載される、冒險者ギルドのカード。最近ティアは、それを見るのを避けている。人族ではあり得ない数値が書かれているので、直視するのが辛いのだ。

「さて、そろそろ帰ろうかな」

森の出口へ向かつて歩き出したティアだが、しばらくして立ち止まる。

「……フットウルフが五頭にウッドベアが一頭。物足りないけど、まあいいか」

そう言つて、進行方向からやってくる魔獸を迎え撃つべく、アイテムボックスクから棍棒こんぼうを取り出した。

そして六頭の魔獸をあつさり倒したティアは、森を出るまでの間に更に十数頭を倒し、街へ向かつて意気揚々と歩き出す。

「おつと。そろそろ解いておこうかな」

魔術を解いて本来の姿に戻ると、棍棒をアイテムボックスにしまう。そして風の魔術を使い、いつもの数倍の速さで駆け出した。

十分もしないうちにサルバの街の外門が見えてくる。そこで風の魔術を解き、人から怪しまれないようになんびりと歩く。冒險者ギルドに登録しているとはいえ、まだ子どものティアが一人で魔獣のいる森に行っていたと知られたくはなかったのだ。特に過保護なルクスの耳に入るのは避けたい。

街へ続く街道には、商人や旅人、冒險者達の姿がある。この時間にやつてくる冒險者達は、余所者が多い。どこから来たのだろうと思いながら、ふとその冒險者達の剣を見て、ティアは思った。

「そろそろ、ちゃんとした実戦用の武器が欲しいな……」

今までは、木製の棍棒を愛用してきた。木製と言つても、使い方によつては相手を死に至らしめる事もできる。

しかし当然、剣のように切り裂いたり突き刺したりといった事はできない。実際に生死を分ける戦いとなれば、棍棒よりも剣の方が断然有利だろう。

「よしっ。お金ならあるし、さつそく作つてもらおう」

思い立つたら吉日だ。幸い今日は、口うるさいお目付け役——ルクスもいない。とつておきの武器を注文しようと思いつつ、ティアはサルバの街へと入つていく。そして、ひとまず店を紹介してもらうため、冒險者ギルドへ向かつた。



「ベル様。あちらのお店がお薦めです」

昼時を過ぎ、人通りがやや少なくなってきた時分。ティアの兄ベリアローズと従者のクロノスは、ゆつたりとした足取りでサルバの街を歩いていた。

「そうなのか？ よく知つてるな」

「この街の隅々まで把握しておりますので」

「……お前がこの街に来てから、まだひと月しか経っていないはずだが」

怪訝な顔をするベリアローズは、今年で十五歳。輝く金髪と翡翠色の瞳を持ち、まるでお伽噺に出てくる王子様のようだ。すれ違う女達はもちろんのこと、男達もみな振り返つている。

「隅々まで調べませんと、落ち着かないのです」

そう言つて苦笑するクロノスは、今年で二十八歳になる。背が高く、腰には長くて細い剣——レピアを差していた。

切れ長の目に、落ち着いた物腰。ただ者ではない雰囲気を漂わせている。だが何よりも特徴的なのは、その髪の色だつた。半分は茶色で、残り半分は銀色に輝いている。この銀の髪は先祖代々受け継がれているものだつた。

「それはあれか？ 前の仕事で身についた癖みたいなものか？」

「恐らくそうかと……ご不快でしたか？」

「いや。むしろ頼もしいと思うぞ」

「ありがとうございます」

ベリアローズの言葉を聞いて、クロノスはほつとしたように微笑んだ。

実はこの一人、ついひと月ほど前に出会った時は、誘拐犯と被害者の関係だった。しかし、ひょんな事からクロノスは、ヒュースリー伯爵家に雇われる身となつたのである。

「それで、この店がいいんだな？……なるほど。ここならティアに似合う髪飾りが見つかりそうだ」ベリアローズはそうクロノスに確認した。

『祝福の儀』という七歳の子どもを祝う儀式が、まもなく行われる。もちろんティアも出席するので、伯爵令嬢である彼女に相応しい髪飾りを探しているのだ。

「はい。ドレスアップしたティア様には、少々大人向けの落ち着いたものがお似合いになるだらうと、リジットさんも話していました」

「リジットも？ そうか。ならば間違いないな」

有能すぎるほど有能な家令が言うのなら間違いない。そう思い、ベリアローズは意気揚々と店内へ入つた。

だが、一歩入つたところで体が強張り、つい立ち止まってしまう。

「……ふう……」

ベリアローズは、ゆっくりと息を吐いて体の力を抜く。それを見たクロノスは、店内に数人の女

性客がいる事を確認し、ベリアローズの心情を察した。

「ベル様。大丈夫でしょうか？」

「あ、ああ。どうにか見て回れそうだ。こればっかりは、ティアのスパルタ教育に感謝だな」

「どうか、ご無理はなさいませんように」

ベリアローズは幼い頃、誰もが天使のようだと口を揃えるほど可愛らしかった。だが、その容姿が原因で、何人の乳母<sup>うば</sup>に誘拐されたのだ。

その経験が元で、極度の女嫌いになつてしまつたベリアローズ。心に深い傷を負つた彼は、隠居した祖父母と共に田舎で暮らしていた。

しかし、先日祖母が身罷<sup>みまか</sup>つたのをきっかけに、祖父はサルバの本邸へ戻る事を決めた。ベリアローズ自身も来年から貴族の子息が通う学校へ入学するため、このサルバで暮らす事になつたのだ。

そんなベリアローズに思わず試練がやってくる。それは妹のティアとの出会いだつた。

母でさえ拒絶してしまうほどの女嫌いを克服させるべく、ティアは彼に厳しい修行を課した。これにより、ベリアローズは半ば無理やりではあるものの、女嫌いを克服する事ができたのである。「無理は無茶によつて可能になるのだと、ティアが言つていた」

「それは素晴らしいお言葉ですね」

「クロノス……いや、なんでもない」

ティアに心酔しているクロノスに呆れ、ツッコミを入れようとしたベリアローズだが、言つても無駄だと思つて首を横に振る。そして気を取り直し、店内に並ぶ装飾品を物色し始めた。

怪訝な顔をしていたクロノスも、すぐに元の表情に戻り、ベリアローズと共によきそうな商品を探した。

「ティア様は、どのようなドレスをお召しになるのでしょうか？」

「母上が選ぶようだから、ピンク一択だろうな。髪飾りも同じピンクにするか……ああ、白もいいな」「ええ。ティア様の髪色に映えるでしょうね」

クロノスはそう言つてにこやかに微笑む。

「うん。これかな」

ベリアローズが選んだのは、紅色、薄紅色、白色の小さな花々で形作られたバレッタだつた。

「可愛らしくて清楚な花ですね。きっとティア様にお似合いですよ」

「ああ。初めての贈り物としては上等すぎるかもしれないが、今までの礼も兼ねて贈ろうと思う」

ベリアローズ達は満足げに頷き合うと、会計を済ませて店を出るのだつた。

屋敷への帰り道。ベリアローズとクロノスは、前方によく知る人物を見つけた。

「あれは……お祖父様とゲイルさんじやないか？」

「はい、間違いありません。ゼノ様とゲイルさんです」

二人の少し前を歩いているのは、ベリアローズの祖父ゼノスバートと、護衛のゲイルだつた。ゼノスバートは伯爵位を息子に譲つた後、妻とベリアローズを連れて田舎に隠居していた。上品な老紳士といった風情だが、剣の実力はそこらの冒険者よりも遥かに上である。

一方のゲイルは、長らく伯爵家の護衛を務めてきた。この街で唯一のAランク冒険者であり、國內にも十数人しかいない実力者のうちの一人だ。息子のルクスに家督を継がせた後は、ゼノスバートの友人兼護衛として伯爵家に厄介になつてゐる。

そんな彼らも、ベリアローズ達の存在に気付いたようだ。

「お、ベル坊。なんだ？ クロを連れてナンパでもしてるのか？」

ゲイルがからかうように言うと、ゼノスバートが納得した様子で何度も頷く。

「運命の出会いというのは、意外と近くに転がっているからな。いい事だ」

「お祖父様まで……」

ベリアローズは呆れてしまつた。ゲイルの冗談は挨拶みたいなものと思つて聞き流せるが、祖父の方は本氣で言つてゐるに違ひない。

「ははっ。確かに、俺もかみさんは近場で見つけたわ」

そう言つてゲイルは快活に笑つた。

「ベルにも、そんな相手が見つかるといいな」「はあ……」

ゼノスバートに励まされ、ベリアローズは苦笑するしかなかつた。

彼が女嫌いを克服した事を、祖父は誰よりも喜んでいる。これならいざれは結婚もできるだろうと、未来に希望を見出しているようだ。だが、それはさすがにまだ早い。

「そうだ。ルクスと嬢ちゃんを見なかつたか？」

「ルクスとティアですか？ いいえ……」

ゲイルの問いかけに、ベリアローズとクロノスは目を瞬かせる。それらしき人物が視界に入つていれば、二人ともすぐ気付くに違いないからだ。

「では、やはり街の外へ出たという事か……」

ゼノスバートは深刻な顔で顎に指を当て、街の外門の方へと目を向けた。

そんな彼に、クロノスが不思議そうに尋ねる。

「ルクスは本日、伯爵の護衛として隣街に行つてているのでは？」

その疑問に答えたのはゲイルだった。

「そうちだつたんだが、予定よりも早く帰つてきてなあ。嬢ちゃんが屋敷を抜け出した事に気付いて、慌てて出ていつたんだ」

「ティア様がお一人で街の外へ？ それは大変です！」

自身も探しに行くべく一步踏み出すクロノスを、ゲイルが止めた。

「慌てんな。まだ明るい時間帯だし、大した危険はねえよ。第一、あのティア嬢ちゃんをどうにかできる奴なんて、ちよつとこの国にはいねえと思うぞ？」

ゲイルは苦笑しながら言つた。Aランク冒険者であるゲイルがそこまで認める実力者。それがティアなのだ。

「それは分かつておりますが、ルクスに内緒で……というのが気になります」

「お、おう……確かにな。お前、何気に俺らより嬢ちゃんの事を理解してんじやねえか……？」

伯爵家の護衛となつて口が浅いクロノスだが、既にティアの性格や行動パターンを把握している。その事にゲイルは驚いていた。

「いえ、まだまだです」

「頼もしいな」

目を細めて言つたのはゼノスバートだ。彼はティアの祖父として、仕事熱心なクロノスを好ましく思つてゐる。

「ルクスが追いかけてんなら大丈夫だとは思うが、どうする？ 俺らも行くか？」

「そうだな。ルクスはかなり怒つていたようだ。誘拐などよりそちらの方が心配だな」

「ルクスはティアを叱る事ができる唯一の存在ですからね」

ベリアローズも急に心配になつてきだ。もちろんティアの身の安全を心配しているのではなく、ルクスの雷が落ちるであろう事が心配なのだ。その後に『やつてしまつた』と落ち込むルクスを見るのは居た堪れない。

「本氣でティア様を想つてゐる証拠ですね。ティア様と信頼関係で結ばれているルクスが羨ましい」

「クロノス……お前はルクスと違つて、ティアの行動全てを肯定してしまいそうちものな……」

「はい。ティア様が間違つた事をなさるはずがありません」

自信満々で言い切るクロノスに、ゲイルとベリアローズは頬を引きつらせる。

「こいつは冗談じゃなく、本氣で言つてるんだよな？ 嬢ちゃんからどんな教育をされたんだ？」

「ティアの事ですから……教育というより洗脳では……」

「怖えよっ」

ベリアローズの咳きに、ゲイルが全力でツッコミを入れる。

だが、ティアの行動全てを肯定してしまう人物は他にもいた。

「ティアの行動に無意味なものはないからな」

「ゼノ……お前も嬢ちゃんの事になると変なフィルターかかるから、マジでどうにかしろよ?」

「む? そうか?」

呆れ顔のゲイルに指摘され、孫娘を盲目的に溺愛しているゼノスパートは首を傾げる。

そして四人は、街の外門に向かって歩き出した。

賑やかな街を見回しながら歩いていたゲイルは、すれ違う冒険者達を見て、ふと気付いたように

言う。

「なあ、ゼノ。嬢ちゃんはもしかして、マスターんどこにいるんじやねえか?」

「あり得ない事ではないな。ちようど通り道だ。立ち寄つて聞いてみよう」

「だな」

ゲイルとゼノスパートが話しているのは、冒険者ギルドの事だ。ギルドマスターのシェリスと懇意にしているティアは、たびたび彼の執務室を訪れている。今日もルクスがいないのをいい事に、そこに入り浸っているのではないかと思つたのだろう。

冒険者ギルドの前に着くと、ゲイルが確認のために中に入り、すぐに戻ってきた。

「どうでしたか?」

渋面を作るゲイルに、ベリアローズは不安に思いながら尋ねた。

「おう。どうやら嬢ちゃんは武器屋に行つたらしい」

「武器屋……ですか?」

なんだか嫌な予感がして、ベリアローズは顔を強張らせる。

ティアは六歳にして相当な実力者だ。ゲイルの息子であり、伯爵家の護衛の中でも三本の指に入るルクスを、あっさり倒す事ができる。

そんなティアが危険な武器を手にしたらと思うと、ベリアローズは気が気でなかつた。

ティアは街の外に出て戻ってきた後、一度ギルドに寄つたらしい。そして武器屋へ行くと言つて、上機嫌で出ていったそうだ。

「どうしたんだ、ゲイル。どこの武器屋か分かつているんだろう?」

ゼノスパートは怪訝な顔で尋ねた。ティアの居場所が分かつているはずなのに、はつきり口にしないゲイルを不審に思つたのだろう。

何やら悩むような素振りを見せていたゲイルは、難しい顔のまま口を開いた。

「ああ。ルクスの奴もその店に向かつたようなんだが、あそこはなあ……妙な魔術のせいで店を見

つけにくくなつてんだ。客を選ぶし、ちよい面倒なところでなあ」

重い足取りで踏み出したゲイルに続き、他の三人も歩き始める。

そしてクロノスが驚いた顔でゲイルに尋ねた。

「そのような店があるのですか?」

「おう。つーかクロの剣も、そこで調整してもらつたんじやねえのか？」

ゲイルはクロノスの剣を見ながら言う。しかし、クロノスは首を横に振った。

「私は存じ上げません。ティア様がどこかに調整を依頼したとは聞いているのですが」

「へえ。なら、やっぱあの店かもな。嬢ちゃんほどの実力がありやあ、あの店に客として充分認められる。妙な魔術と店主の気難しささえ抜きにすりやあ、この街どころか国で一番の武器屋だしな」細くて入りくんだ路地を、ゲイルは迷いなく進んでいく。

一方、街の隅々まで調べたはずのクロノスや、この街をよく知るゼノスバートは首を傾げた。

「そんな店があるとは知らなかつたな」

「知らないて当然だ。店に辿り着けんのは、そこの武器に見合う実力を持つた奴だけだ。しかも店に行つた事がある誰かに紹介してもらわねえと、たどえ場所を知つても辿り着けんらしい」

ゲイルはAランクに上がつた時、顔なじみのギルドの職員に紹介してもらつたという。今持つて

いる剣が、その時に作つてもらつた剣だつた。

「俺と一緒に店の近くまでしか行けねえが、嬢ちゃんの方がそろそろ出てくる頃だらうから、会えんじやねえかな」

そうしていくつかの角を曲がつた時、前方から賑やかな会話が聞こえてきた。

「帰つてくるのが早いよ」

「俺がいなからつて、一人で出かけるんじやないつ」

「拗ねたような少女の声と、それを叱る青年の声。間違いなくティアとルクスだ。

「だつて、ルクスはまだお店に行けないもん。私についてきても、手前で待つてなきやならないんだよ？ それに、この辺には人を迷わせる魔術がかかつてるから、下手に動いたら方向が分かんなくなつちやうの。つていうか、実際にそなつたんでしょ？ その歳で迷子になつた気分はどう？？」

「くつ……」

「ね？ 屈辱的でしょ？」だからマテイも連れてこなかつたんだもん」

いつもの調子で話す二人の声を聞いて、ベリアローズ達は安心した。

「ルクスのためを思つて秘密にしてたのに……ううつ」

「あ、いや、だ、だからつて、一人で歩いてたら危ないだろ？」

「でも、ルクスを迷子にするのは嫌だもん……」

「ティア……」

未だ姿は見えないが、二人の表情を想像できてしまい、ベリアローズ達は複雑な気持ちになる。

最初に口を開いたのは、感極かんきわまつた様子のクロノスだつた。

「ティア様は我々護衛にまで優しいお心遣いをしてくださる……本当に素晴らしい方です」

「クロ……お前はもうちょい現実を見る。嬢ちゃんの言葉は少し疑うくらいがちょうどいい」

「はい？」

護衛の先輩としてクロノスに忠告するゲイル。しかし、そんなものはクロノスには届かない。既にティアの色にすっかり染まつてしまつているからだ。

そして現実が見えていないのは、ゼノスバートも同じだつた。

「ティアはルクスを慕つて いるからな。迷子にするのは忍びないのだろう」

「ゼノ。孫娘が可愛いのは分かる。ティア嬢ちゃんの事は俺も可愛いと思うが、あれはもう子どもじゃなくて女だ。ただの無邪気な子どもだと思うな」

ゲイルは友人の目を覚まそうと必死だった。

そのせいで、自分の言葉がベリアローズに与える影響にまで考えが及ばなかつたのだろう。

「女……？ そうか……やはり女というのは……？」

ベリアローズの顔からじんじん血の気が引いていく。せつかく治つた女性嫌いが再発しそうなのが見て、ゲイルは慌てて訂正した。

「べ、ベル坊っ。違ちげえんだつ。あ、あのなつ、世の中の女がみんな、嬢ちゃんみたいに計算高いわけじやねえ。だから安心しろつ」

必死の弁解を試みるゲイル。

そこへ、ようやくティアとルクスがやつてきた。

「あれ？ みんな揃そろつてどうしたの？」

「どうしたんだ親父」

呑気な二人の声を背中に聞いたゲイルは、勢いよく振り返つてルクスに言う。

「お前はいちいち簡単に転がされてんじやねえよつ!!」

「え？」

ルクスはなんだかんだ言いつつ、ティアにいいように転がされている。ゲイルはそう教えたかつたのだろうが、当のルクスにはまるつきり自覚がないらしい。

「もう、心配なんとしてやらんからなつ」  
俺は知らんとばかりに、ゲイルは一人踵きびすを返して元来た道を戻つていく。

「なんだ？ 変な親父だな」

「ゲイルさん……きつとルクスを心配して来てくれたんだね」

ティアはそう言つて笑みを浮かべた。

この笑顔にも、クロノスとゼノスバートはまんまと騙だまされていた。二人は微笑みながら、ゲイルが消えた方向へと目を向けている。

結局、ゲイルの忠告も虚むなしく、ティアに対する彼らの誤解は解けないままだつた。

◆◆◆

その後、ティアは前世の夢を見た。

それは決まって、これから起きる何かを暗示させるものだつた。嫌な予感がするが、同時に懐かしくて切ない思いが胸に広がる。

数日前に隣国との戦争が終結し、バトラール王国の王宮は穏やかな雰囲気に包まれている。そんな王宮の庭から、困惑したような女性の声が聞こえた。

「まったく、どこへ行つたんだ？」

昼時を過ぎた頃、一人中庭を歩き回っているのは第一王女のマリナだ。そこに駆けてきたのは、第二王女のターナである。

「見つかりまして？」

「いや、中庭にはいないようだ。そつちは？」

「訓練場を見てきたのですが、そちらにもいないみたいで……」

「そうか……」

困ったな、と悩みながら二人で建物の方へと向かう。その時、視界の端に赤いものが映った。反射的にそちらへ目を向けると、五人の王妃達が談笑しながら中庭に面した廊下を歩いていた。そのうちの一人——第一王妃エルミーナが二人に気付いて話しかけてきた。

「あら、マリナ。今日は珍しくドレスを着ているのね」

「母上……嫌味ですか？」

「ふふっ。いつもの訓練着が王女に相応しくないという自覚はあるのね？」

「……」

母エルミーナの言葉に、マリナは頬を引きつらせる。その様子を見て、第三王妃のマティアスが笑つた。

「ははは。エル。マリナは、どちらの格好も似合<sup>ふさわ</sup>うからいいだろう？ それより一人とも、どうかしたのか？」

王妃達が困っているのに気付いたらしく、マティアスが問う。

「あ、その……サティアのドレスをあつらえようと思つて、仕立屋を呼んだのですが……逃げられてしまつて……」

もちろん、逃げたのは仕立屋ではなくサティアの方だ。それを察したマティアスは、苦笑した後、溜め息を一つこぼした。

「すまないな。迷惑をかけて」

「いえ、そんな……」

王妃二人は首を横に振る。

他の四人の王妃達は事情をよく理解していない様子で、呑気に盛り上がりがつっていた。

「サティアちゃんは元気ですものね」

「でも、あの子のドレスアップ姿は是非見てみたいわ。きっとマティアス様のように、赤い髪がドレスに映えて綺麗よ」

「あのくらいの子どものドレス姿は、可愛らしくていいわよね」

「サティアちゃんはダンスマチヤんとできるのよ。絶対にステキだわ」

「そんな会話を聞いて、マティアスは決まり悪そうに笑う。」

「私もそうだが、ティアはじつとしているのが苦手だからな」

「マティアス自身、採寸のために拘束されるのは好きではないらしい。彼女と似た性格のマリナは

弱つた顔で言う。

「気持ちは分からぬくもないのですが……採寸する前に逃亡されまして……」

「だがサティアの事だ。自分のサイズを書いた紙でも残していくたんじやないか？」

「……はい、置いていきました……」

メイドが目を離した隙にどこかへ消えたサティア。彼女が立っていた場所に、一枚の紙がヒラリと舞い落ちた。そこにはドレスを仕立てるのに必要なサイズが全て書かれていたのだ。

「まあっ、抜かりありませんのね」

「頭のいい子ですもの」

「さすがはマティアス様のお子様です。消えるところを見たかったですわ」

「メイドになんて絶対に捕まりませんわよね」

「……お母様……それを聞いたらメイドが泣きますわ……」

おつとりしているターナでさえ、母達の会話には呆れてしまつた。

「ふむ……メイド達を泣かせるのは問題だな……今の時間帯は見張りの兵もいないし……恐らくあの辺りだろう」

一人中庭へ出たマティアスは、王宮の建物を見上げて呟いた。意味が分からず、マリナ達は首を傾げる。

「マティアス様？」

「少し待つていろ」

そう言つた瞬間、マティアスの姿が消えた。残された六人は驚きの声を上げる。

「「「えつ？」」

「「「まあっ」「」」

数秒後、建物の方からおかしな声が聞こえてきた。

『あ、母さ……ふぎやつ！』

誰もが一瞬で事態を把握する。やがてスタッツと着地したマティアスは、片手にサティアをぶら下げていた。首の後ろを掴まれているサティアの姿は、まるで子猫のようだ。

「さあ、煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

「きゅう～……」

サティアは完全にノビていた。六人の中でいち早く我に返つたターナが、急いでそちらに駆け寄る。

「マ、マティアス様つ。首が絞まっていますつ」

「ん？ これくらい大丈夫だ。私の娘だしな」

「そういう問題ではありませんつ」

「つサ、サティア。大丈夫か!?」

一瞬遅れて我に返つたマリナが、慌ててマティアスからサティアを受け取る。

「うう～……」

表情は苦しげだが一応無事なようだと、ターナと二人でほつと胸を撫で下ろした。

「な、大丈夫だろ？ 気絶しているうちに仕立屋のところへ連れていくといい」

「はい……」

「さて、ライラを待たせてはいかん。早く行こう」

そう言つて歩き出すマティアスに続いて、他の王妃達も廊下の奥へと消えていった。

「ライラ様のお見舞いですか……」

「みたいだな……」

五人の王妃達は、体調を崩して寝込んでいる第六王妃ライラを見舞いに行く途中だつたらしい。それはいいとして、王妃でありながら兵士顔負けの軽業を見せたマティアス。なんて自由な人なんだと思わずにはいられないマリナとターナだつた。腕の中で氣絶しているサティアを見下ろし、マリナは溜め息をつく。

「ま、まあ……見つかってよかつた」

「はい……私達も参りましょうか……」

そう言つて、二人は仕立屋の待つ部屋へと戻るのだつた。



眠りから覚めたティアは、いつもよりも緩慢な動きで起き上がつた。

「なんか、イヤ／＼な予感がする……」

夢で見たのは、バトラール王国がまだ穏やかであつた時代——ティアの前世であるサティアが、八歳の頃の記憶だつた。

『なんかきそう』

『てきちゅうしちやう』

『はずれない』

「精霊ちゃん達……やめてよ、フラグが立っちゃうじやん」

ティアの前に楽しそうに舞い降りてきたのは、大人の手の平に乗るサイズの小さな精霊達だ。風の精霊は緑、火の精霊は橙<sup>だいだい</sup>、水の精霊は青の色を纏<sup>まと</sup>つていて。

精霊は『精霊観力』と呼ばれる特殊な力を持つ者にしか、見る事ができない。ティアも、かつてサティアとして生きていた頃には見えなかつたのだ。

「はあ……なんか落ち着かない。あのウザい天使が夢に出てきた後みたい……」

ウザい天使というのは、サティアに神判を告げたカラントの事だ。

転生するだけならまだしも、神から『世界を平和に導いてほしい』などと余計な使命を与えられた事は、未だに納得がいかない。

だが前世の夢を見た以上、何かが起こりそうな予感がする。その予感は残念ながら外れた事がなかつた。

『きょうもへいわ』

『もんじゃない』

『あらしのまえ』

「嵐の前の静けさ？…………今のうちに脱走しどくか」

ティアは勢いよくベッドから抜け出し、昨晩用意しておいた服に着替えようとする。

だが、令嬢仕様の可愛らしいワンピースは脱走に向かない。だからと言つて、動きやすい外出用の服を着るわけにもいかなかつた。

なぜなら脱走する前に、家族と朝食を取らなければならないのだ。一応伯爵令嬢であるティアが、朝食も取らずに屋敷を出していくのはよろしくないだろう。

「うーん……前世ではみんなに本性がバレてたから、急に姿を消したところで大した騒ぎにはならなかつたんだけどな……やっぱり今回も、早めに本性を見せておくべきかな?」

父親のフィスタークとほとんどの使用人達は、ティアを普通の少女だと思っている。しかし、ティアは全く普通ではないのだ。

とはいえ、突然本性を出したらフィスターク達を驚かせてしまう。今はまだ秘密にしておくのが無難だろう。

「とりあえず、ご飯を食べたらすぐに出よう」

そう決めたティアは、ゆるいウェーブのかかった髪を梳かして、身支度を整える。そして、日課であるシリスからの熱いモーニングコールを適当に受け流した。

すると、ちようどいいタイミングでドアがノックされる。

「ティア。起きてるか?」

「うん。おはようルクス」

それを聞いてドアを開けたのは、護衛のルクスだった。

「おはよう。食事の用意ができたぞ」

「はあーい」

ルクスはティアが五歳の時から専属護衛をしてくれている。眞面目な性格で実力も申し分ないのだが、少々過保護なところが玉に瑕だ。

「ん? マティはどうした?」

「あれ?」

ベッドの方を振り向いたティアは、その脇にいるはずのマティがいない事に気付いた。

ティアのよき相棒であるマティは、魔獣ディストレアの子どもだ。ティアはひょんな事から生まれたばかりのマティと出会い、その母親から託されたのだった。

マティを探すティアの傍に、緑の髪をした美しい女性が姿を現した。彼女は風の精靈王で、ティアは風王と呼んでいる。

『ここにおりますわ』

風王が指差したのは、ベッドの下。ティアとルクスが揃つて覗き込むと、そこにはマティが寝転がつていた。

「いたな……」

「いたねえ……」

寝返りを打った拍子に入り込んでしまったのだろうか。腹を上に向けただらしない格好で、幸せそうに寝こけている。その姿はただの子犬にしか見えなかつた。

『すう……んむー……』

「これが本当にディストレアなのか？」

「ま、まあ、平和な証拠だよね」

ディストレアは伝説の魔獣や最強の神獣などと呼ばれ、人々に恐れられている。その体毛は鮮やかな赤色で、成体になれば体高は成人男性の身長をゆうに超える。

だが、マティがディストレアだとバレれば色々と面倒な事になる。だからティアの魔術で体毛を黒に変え、体も小さくしているのだった。

「あ、埃がついて白くなってるじゃん」

黒く艶やかな体毛は、少しでも埃がつくと非常に目立つ。

ティアはやや呆れながら、マティを少々強めに振り起こした。

「マティ、朝だよつ。ご飯はどうするの？」

『んん～……ご飯～』

「ほら、シャキッとして」

『んあ～い……あれ？ まだ暗い』

「それはベッドの下だからだよつ。ああああ、そつち行つちやダメ。掃除してくれるのはありがたいけど、埃で真っ白になつちやうからつ」

寝ぼけているマティは立ち上がりろうとして失敗し、奥へと転がっていく。そして、ティア達のいる方とは反対側から抜け出した。

『お掃除？ うわあ～、マティ白くなってるよ？』

寝ている間に変身したと思つて喜ぶマティ。更に呆れたティアは、後ろにいるルクスに言う。

「……ルクス……悪いんだけど……」

「分かつた。ティアは触るな。……マティ、来い。水浴びさせてやる」

『わあ～い』

ルクスはマティの首根っこを掴んで持ち上げ、外へ連れていった。

「嫌な予感がしたのは、これのせいじゃないよね？」

『ティア様、何かお困りでしようか？』

「ううん、いいの。大した事じやないから」

『そうですか？ 必要でしたら、いつでも力を貸しますよ』

「ありがとう」

風王だけでなく、水、地、火の精靈王達も、ティアが望めばいつでも力を貸してくれる。それは女神として転生したおかげ——つまりは特典のようなものだった。

自分が女神だと認めていないティアとしては複雑な気持ちだ。だが、『使えるものは使う』という精神を持つティアは、この特典を遠慮なく利用させてもらつていてる。

『お食事が冷めてしましますわ。火のを呼びましょうか？』

「……いや、さすがにそんな事で火王を呼ぶのはちょっと……」

精靈王達もルクスと同様、少々過保護なのが玉に瑕だった。

朝食を終えて部屋に戻ったティアは、さっそく外出の準備をする事にした。令嬢らしい可憐なワンピースから、冒險者達が着るような動きやすい服に着替えるのだ。

今日は何をしようかなと考えながら、着ているワンピースに手をかける。  
ちょうどその時だつた。

「何?」

胸騒ぎを感じたティアは、反射的にドアの方へと目を向ける。

次の瞬間、そのドアが外側から勢いよく開かれた。

「ティアちゃんっ」

「へ!? お母様っ!?!」

ドアを蹴破る勢いで部屋に飛び込んできたのは、ティアの母シアンだつた。長い金髪を編み込んで前に垂らし、翡翠色の瞳は子どものような好奇心に溢れている。

幼い頃から病弱だつたシアンは、ティアを産んでからも、ベッドから出られない日がほとんどだつた。だが、ティアが作った薬を飲んで元気になつた彼女は、今までできなかつた事をしようと精力的に動き回つている。

しかし、それには弊害<sup>へがい</sup>もあつた。失われた時間を取り戻そうとしてか、シアンは少々元気すぎるくらいに動き回り、しばしば笑拍子もない行動に出でていた。誰しも子どもの頃に遊びの中で加減というものを覚えていくのだが、シアンはそれができなかつたのだ。

屋敷の者達は、シアンが元気になつて喜んでいる半面、困つたなど頭を悩ませている。  
それはティアも同じで、突然部屋に来たシアンに困惑していた。

「さあ、ティアちゃん。これから忙しくなるわよっ」

「へ?」

シアンの表情は、なんだかとても楽しそうだ。そして、なぜか手を握つたり開いたりしている。  
(やつぱり嫌な予感がする……)

昨晩見た夢の光景がちらつき、ティアは思わず身構える。  
その時、シアンの後ろから熱い視線を感じた。

「メ、メイドさん?」

廊下に並んだメイド達が、ソワソワと落ち着かなそにしている。

(こ、これって……まさか……?)

これと同じ光景を、ティアは前世で散々見てきたのだ。

(や、やだ！ アレだけは絶対にいやあああ!!)

そんな心の叫びは届かず、シアンは最近鍛<sup>きた</sup>えた筋力を使つてティアを引きずつていく。  
「ティアちゃんの晴れ舞台ですもの。ステキなドレスを仕立てなくちゃね」

「……」

間違いない。これから行わるのは、ティアが唯一苦手としているもの——そう、ドレスの採寸だつた。

「え、えっと……お母様。サイズなら自分で分かつてます。それを教えるので、あとはお母様の好きな感じに作っちゃつてください……」

ティアは必死に説得を試みる。逃げたくて仕方がなかつた。

「あら、測り直さなきやダメよ。だつて、今のティアちゃんに一番合うドレスにしなくちゃならないんだもの。それに、ティアちゃんにとつては初めてのドレスでしよう？ 着た時の立ち居振る舞いも、しつかり練習しなくちゃね」

（初めてじゃないですっ。大丈夫ですっ）

そう言えるはずもなく、ティアはそのままどこかへ連行される。その後ろには、ステキな笑顔のメイドさん達が続いていた。

「新しい服を仕立てるのつて楽しいわつ。ティアちゃんに女の子のお友達ができたら、お茶会を開くといいわよ。その度にドレスを作つて、もつとおしゃれを楽しめなくつちや」

「お、お茶会!?」

ティアの動搖をよそに、シアンは楽しい妄想を膨らませている。

「そうだわっ。今度、予行練習をしましようねっ。私もお茶会には参加した事がないから、一緒に練習しましょうっ」

「へ？」

シアンはティアを振り返つて嬉しそうに言う。

「大丈夫よ。参加した事がなくても、お茶会がどういうものかはちゃんと分かつてているから。一緒に

に頑張りましょねっ」

（何ですか!?)

恐らく、お茶会でのマナーについて言つていいのだろうが、そうと分かつていてもティアは認めたくない。そんな事が始まれば、自由時間が減るのは目に見えている。

シアンに引きずられるようにして廊下を歩いていたティアは、前方にルクスがいるのに気付いた。

「ルクスっ」

ティアは目で助けを求めたが、彼はあっさり裏切つた。

「ティア。大人しくするんだぞ」

「失礼なっ！ つてか、なんで助けてくれないの!?」

ティアの声を無視して、ルクスはシアンに言う。

「奥様。ティアが脱走しようとしたら、私を呼んでください。お手伝いいたしますので」

「まあ、ルクス君つたら。ティアちゃんは脱走なんかしないわ」

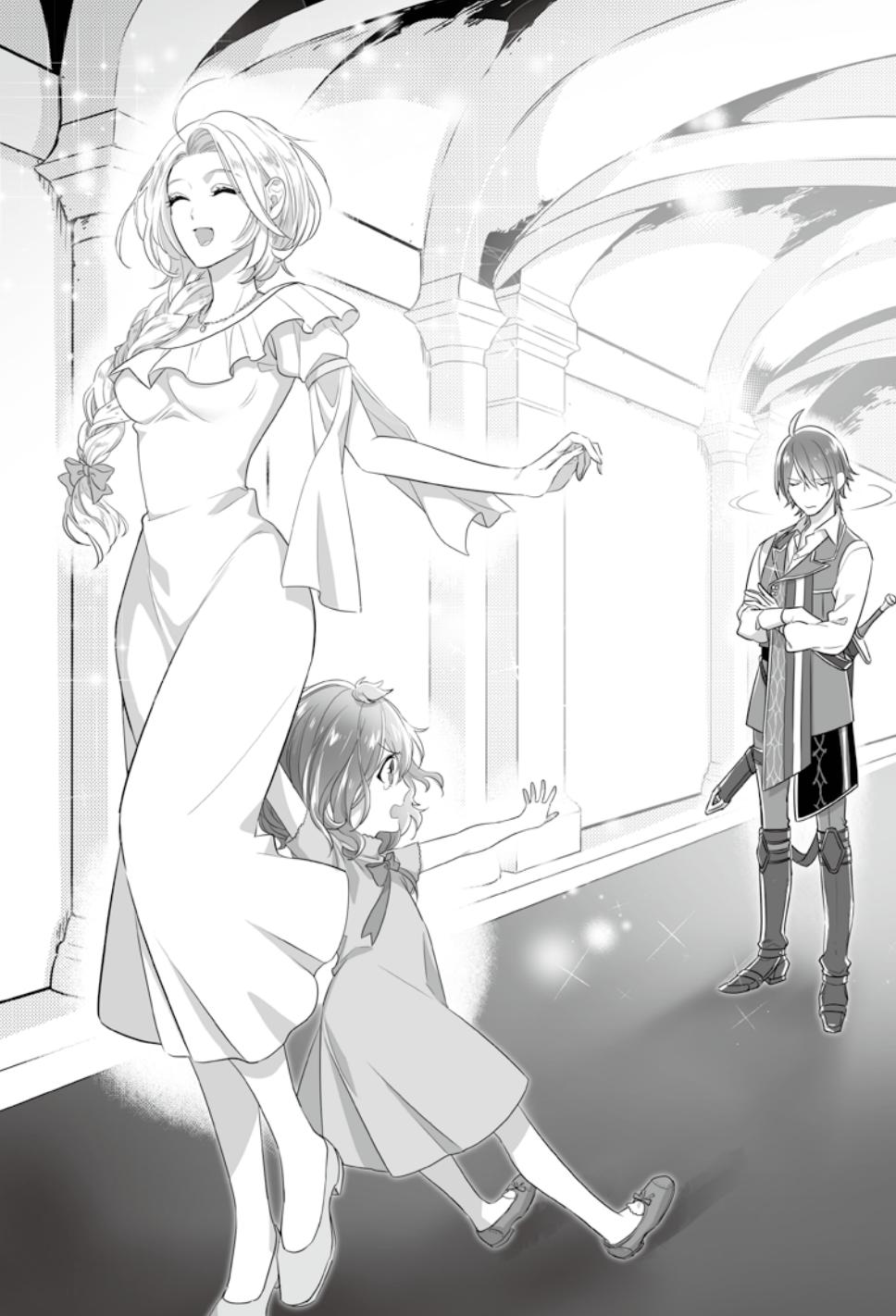
「いえ、その可能性は充分にあります。どうかお気を付けください」

「そう？ 分かったわ」

「ルクス!!」

ティアがこれだけ嫌そうにしているにもかかわらず、ルクスはシアンの味方をすると宣言した。その事にティアは苛立つたが、だからといってシアンの手を振り払う事などできない。

「さあ、まずはドレスよっ。みんな、張り切つていくわよっ」



「「「はいっ！」」

（いや！！ お外に出してえええ!! 覚えてなさいよつ、ルクス!!）

この日から三日間、ティアはシアンの監視の下、採寸や試着を幾度となく繰り返す事になる。ついでとばかりに立ち居振る舞いや礼儀作法なども教えられ、屋敷から出る事すらできなくなるのだった。

### 『祝福の儀』

それは七歳になる子どもの存在を神に報告し、加護を願う儀式だ。今年七歳の誕生日を迎えるティアも、その儀式に参加するのだが……

「王族の誰かが祝いに来るって言うけどさあ……王族は伯爵の娘なんていちいち気にしないでしょ？ ただの形式じゃんね？」

冒険者ギルドの奥にある、ギルドマスターの執務室。そこにやつてきたティアは、疲れた顔で溜め息をついた。

貴族の子どもが参加する儀式には、王族の誰かが祝いに来るそうだ。とは言つても、単に王の祝辞を伝えるだけ。この人、本当に王族？ と思うような人物が来る場合もあるという。「マナーの勉強なんて今更だし……それに何より、神に報告つて……もうさ、影武者とか用意しちゃおうかな……」

を勉強したり、ドレスを仕立てたりするのは面倒だ。

「ふふっ、そんなのダメですよ。それに私は、ティアのドレス姿を見てみたいですね」  
ギルドマスターであるシリスの言葉に、ティアはきょとんとした。

「ん？ なんで？」

「さあ、なぜでしょうね？」

(それって、パパ的な目線？ それとも、初孫の成長を喜ぶおじいちゃん的な？)  
クスクスと笑うシリスに、ティアは首を傾げる。その様子を見たシリスは、ますます満悦の表情になる。

サルバの冒險者ギルドをまとめるシリス・フィスマは、またの名をジルバール・エルースという。長い金髪は美しく、エルフの特徴である長く尖った耳も魅力的に見える。女性と見紛うほどの美貌の持ち主で、本人の意思に関係なく多くの者を虜にしていた。

彼はエルフの中でも特に長命で、高い魔力を持つハイエルフだ。以前は三つあるエルフの里のうちの一つ、エルースの里長を務めていた。

そんな彼がなぜ冒險者ギルドのマスターになつたのかといえば、理由はただ一つ。いずれこの地に転生すると預言されたティアと、再会するためだつた。

シリスはティアの前世であるサティアと結婚の約束をしていた。それから五百五十年以上の年月が経つた今でも、ティアを強く想つている。ティアとしては重すぎる愛は遠慮したいところなのだが、前世の自分を知る数少ない友人として、彼の事を大切に思つていた。

「昔はさあ……私が城から逃げ出しても母様や姉様達は、笑つて許してくれたんだよね……あ、一回だけ母様に強制連行されたけど……」

ここ数日、屋敷に軟禁状態だったティア。我慢の限界に達した彼女は隙を見て屋敷を抜け出し、この執務室に転がり込んだのだ。

「もうさ、猫被つてんのも限界なんだよね」

実際はほとんど被っていないのだが、それでもティアには窮屈に感じる。そんなティアを慰めるように、シリスは楽しい話題を振つてくれた。

「そういえば、そろそろ家が出来上がるみたいですよ」

「へ？ あ、本当!？」

今、この街の魔術師ギルドでは『創工士技術大会』なるものが行われている。創工士と呼ばれる職人達が、ここ数ヶ月ほど技術を競い合つていたのだが、その課題として造られていた家が完成間近であるらしい。

「じゃあ、そろそろ始めてくれる?」

「ええ。そう言うと思って、今日中にも魔術師ギルドに提案するつもりです」

「ふふっ、絶対に話を通してよ?」

「もちろんです。ティアのためですからね」

ティアはあるものを手に入れるべく、シリスと一緒にこの大会を計画したのだ。それは【ゲルヴァアローズの欠片】と呼ばれる、家を持ち歩ける魔導具である。

【ゲルヴァローズの欠片】を作った目的は、単にティアが冒険用の持ち運べる家を手に入れるためだけではない。女であるゆえに不遇を強いられていたナルカという創工士に、実力を示せる場を提供するためでもあつた。

魔工師としての知識を使い、シェリスと共に【ゲルヴァローズの欠片】を作り上げたティア。それを真に完成させるには、実装するための家が必要だつたのだ。

ティアの目論見通り、ナルカは順調にその力を發揮し、多くの者の意識を変えた。あとは、優勝

者の造つた家が伯爵に献上されれば、それを伯爵令嬢であるティアが手に入れるのは簡単だ。

そうシェリスが提案していたのだが、それでは方々から不満が出るだろうと考え、ティアは却下した。

そして、ここ数ヶ月の間、他の方法を考えていたのだ。

「これで冒険者として旅立つ用意が、また一つ整うよ」

冒険者となつて自由に生きる事。それがティアの一番の夢である。その夢を叶えるため、ティア達は新たな計画を進めるのだった。

数時間後、ティアは満面の笑みで屋敷に帰つてきた。上機嫌なのは、冒険者ギルドであるものを手に入れたからだ。

「サラちゃんつてば、さすがだよね。チョイスがマジ最高!!」

サラちゃんというのは、冒険者仲間のザランの事だ。男氣溢れる性格だが、少々ドジなところが

あつて、からかうと面白い。

本当はサランという少女のような名前なのだが、大柄かつ老け顔に成長してしまつたため、今はザランと名乗つている。その名がすっかり定着しているにもかかわらず、ティアはサランという名の方を気に入つて『サラちゃん』と呼んでいた。

そのザランは最近、ティア専属の取り立て屋をしている。取り立て屋と言つても、別に悪どい事をしているわけではない。ティアがルクスに内緒で賭けをした相手から、報酬を代わりに受け取つてくれているのだ。

「んつふつふつ」

ティアは笑いが止まらない。ザランが今回取り立ててくれたものは、ティアがちょうど今欲しいと思っていたものだつたのだ。まさにナイスタイミング。

そして更にいいタイミングで、会いたいと思っていた人物を見つけた。

「あ、ティア様。お帰りなさいませ」

ティアが屋敷の廊下で出くわしたのは、つい先日この伯爵家に雇われたラキアという少女だ。彼女は幼い頃に両親を亡くし、クロノスら三人の兄と共に旅をしていたという。

そんな彼らは実は、ティアが前世で暮らしていた城の女騎士、アリア・マクレートの子孫なのだ。騎士としての実力はもちろんのこと、志も高かつたアリア。その子孫であるラキアも、主人を守つて戦うメイドになる事を夢見ている。

出会つた時はまるで男の子のようだつたが、今は短い髪を綺麗にまとめて女の子らしくなつてい

る。銀色の前髪はアリアの髪の色と同じで、チャームポイントになつていた。

メイド姿がすっかり板についたラキアは、毎日楽しそうに働いている。

「ただいま、ラキアちゃん。ちょうどよかつた。これ、ラキアちゃんに」

「へ？ あ、ありがとうございます？」

差し出されたものを受け取つて、ラキアは首を傾げた。

それは一冊の本だつた。

「ふふふつ、ちゃんと読んで勉強しといてね。三日後に実践してもらうから、そのつもりで」

そう伝えて、ティアはその場を後にする。一人残されたラキアは、本の題名を見て呟いた。

「……『忍ぶ者の極意』？」

全く意味が分からず、ラキアは先輩メイドに呼ばれるまで、しばらくその場に立ち尽くしていた。

「ふんつふんつふん」

ラキアに本を渡したティアは、ますます上機嫌で部屋へ向かう。

その途中、またも会いたかった人達に出くわした。

「あ、お嬢様」

「お帰りなさいませ」

未だ低くなりきらない声の少年達。彼らはラキアの兄、ユメルとカヤルだ。

二人は双子なのでそつくりだが、見分けるにはその髪を見ればいい。ユメルは向かって右側に、

カヤルは左側に、銀の髪が一房ある。

「ただいま。ユメル、カヤル。お土産あるよ」

「なんですか？」

この双子は、よくハモる。

そんな彼らにも、ティアは一冊の本を手渡した。

「しつかり読んで予習しこんだよ。三日後から実践してもらうからね。そのつもりでよろしく」

ティアはそう言つて部屋へ入る。後に残された双子は、本に目を落として呟いた。

「……『抜け技の全て』？」

怪しい本にしか見えないそれを、人に見られたくない。そう思った二人は、本をどちらが持つかでしばらく揉めたのだつた。



フリーーデル王国の王宮は、王都の北寄りにある。

明日から数日間にわたり、各地で『祝福の儀』が行われるため、王宮はどこかざわついた雰囲気

がっていた。

今年で七歳になる貴族の子ども達。その多くは王都の神殿に集まるのだが、一部の子ども達は領地の神殿で祝福を受ける事になつていた。

彼らを祝うべく、王族かそれに連なる者が各神殿へ赴く。

そのうちの一人——第三王子エルヴァースト・フリーデルが、嬉しそうな様子で騎士の訓練場へと入つていった。

「ビアン。急いで出るぞっ」

「え？ ちょっと、エル様？」

突然現れたエルヴァーストに、護衛騎士のビアンは驚く。そして剣を振り上げたままの格好で、慌てて尋ねた。

「ど、どちらへ行かれるのです？」

「ヒュースリー伯爵領だ。ベルとティアに会いに行く」

「……はい？」

エルヴァーストが何を言つたのか、ビアンは咄嗟に理解できなかつた。だが理解した瞬間、顔を青ざめさせる。

そんな彼を気にする事なく、エルヴァーストは続けた。

「三日後に行われる『祝福の儀』に出席するのだ。ティアを祝福しなくてはな」

「え？ エル様がですか？」

「そうだ。父上の許可は取つた」

「はいいい？」

ビアンが動搖するのも当然だろう。

王太子ともなれば、幼少の頃から国の行事に参加させられる。だが王太子以外の王子は、この国の成人年齢——十八歳を迎えないれば行事に参加できないのである。

エルヴァーストはまだ十五歳。国の重要な行事への出席は許されていなかつた。

「ジュレット公爵が体調を崩したらしい。その代役でな」

原則として出席できない王子でも、病人の代役となれば話は別だ。こればかりは仕方のない事として、特例で認められていた。

事情が分かつたビアンだが、念のために確認する。

「……公爵が出席なさる予定だったのは、ヒュースリー伯爵領だけなのですか？」

「いや、他にもある。その手前のドーバン侯爵領もだ。あそこは明日が儀式の日となつてゐるから急いで出るぞ」

「いや、え！ ちょっと……あそこは今から出ても、馬でもギリギリ着けるかどうかの距離ですよ!?」

「だから、急いで出るぞと言つただろう？」

エルヴァーストは腰に手を当てて、呆れ顔をした。

この様子を見て、ビアンは顔を強張らせる。

「どんな強行軍ですか？」

「どうせ通り道だからいだろうと、父上から言われてしまつたのだ。大丈夫。私は若いから、体力には自信があるぞ」

「そういう問題じやありません」

胸を張るエルヴァストに、ビアンは思わずツッコミを入れた。

「問題ない。ドーバン侯爵領の儀式が終われば、次はその二日後だ。ヒュースリー伯爵領には余裕で辿り着ける」

「……」

エルヴァストにとつて、ドーバン侯爵領での儀式はおまけでしかないのだろう。メインの目的は、あくまでベリアローズとティアに会う事なのだ。

それが分かつてゐるからこそ、どうしたものかとビアンは思つてしまふ。

「ほら、さつさと着替えろ。ちなみに私は既に準備万端だからな」

『ご自分だけ先に……つ分かりました。すぐに準備します』

「ああ、頼むぞ」

慌てて駆けていくビアンを見送り、エルヴァストは一人、晴れ渡つた空を見上げた。

抜けするような青。その清々しさは、ティアの底抜けに明るい笑顔を思い出させた。

次いで、その隣で困つた顔をするベリアローズの姿が脳裏に浮かぶ。

『会うのが楽しみだ』

ひと月ほど前、ひょんな事から出会つた兄妹。一人の姿を思い出す度、エルヴァストはその出会いに感謝し、女神へ祈りを捧げるのだった。



『祝福の儀』を翌日に控えた今日。ヒュースリー伯爵フィスタークは、大切な来客を迎えていた。  
「それでは、今日から世話になるぞ」

「はい。精一杯おもてなしさせていただきます」

「いや、そう畏まる必要はない。私は『友人の家に遊びに来ただけ』だ。こんな機会でもないと、なかなかできないからな」

そう言つてニヤリと笑つたのは、第二王子エルヴァストだ。

連れてきたのは護衛のビアンだけだ。他の者がいては気が休まらん

イタズラをバラすような調子で告げた彼に、フィスタークは苦笑した。本来ならば多くの荷物と、それらを運ぶための馬車が必要となる。だが、エルヴァストは最低限の荷物しか持たず、ビアンと共に馬で駆けてきたらしい。

『相変わらずなのですね……』

フィスタークは昔から、密かにエルヴァストを見守つてきた。いや、王子とは思えぬ待遇に文句一つ言わぬ耐える姿を、見守る事しかできなかつたのだ。

エルヴァストの母エイミールはメイドとして王宮に上がり、自ら進んで王妃の影武者となつた。王に見初められて側妃となつた後も、それは変わらない。ただし彼女が影武者である事は、国の重鎮達にしか知られていない。エルヴァストはもちろんの

こと、エイミールの弟であるビアンも知らない事実だつた。

それをフィスタークが知つてゐるのは、エイミールが王宮に上がる前、このヒュースリー伯爵家でメイドとして働いていたためだ。幼い頃のフィスタークにとつて、エイミールは姉のような存在だつたのである。

家令リジットに鍛えられたエイミールは、その実力とかねてからの約束により、王宮へ上がる事となつた。

親友のシアンとは、今でも密かに手紙でやり取りを続けている。他愛もない雑談の中に、数年前からぽつぽつと交ざり始めた相談事。それは息子エルヴァストの事だつた。

エイミールは側妃になつた今でも、敬愛する王妃の影武者であろうとしている。そんな彼女の子どもであるエルヴァストを、重鎮達は王太子を守るための道具として利用していた。

『エルヴァストを王太子の影武者にする気はない』

エイミールからの手紙には、そう書かれていた。エルヴァストは、自ら望んで影武者になつたエイミールとは違うのだ。息子の境遇に心を痛めた彼女は、エルヴァストは役に立たないと重鎮達に思わせるため、彼に冷たく当たつてゐる。

その思いを知つてゐるからこそ、ベリアローズがエルヴァストの友人になつた時、フィスタークとシアンは心から喜んだ。これはいざという時、エルヴァストを守る口実になるだろう。

そんな事を考えながら、フィスタークはエルヴァストに優しく笑いかける。

「そうだ。まだ娘を紹介していませんでしたね。儀式の前に、会つてやつていただけますか？」

「もちろんだ」

その時のエルヴァストの笑顔は、輝いて見えた。それは何かから解放されたような笑顔だつた。ここにいる間は兄の影武者や身代わりではなく、ただのエルヴァストでいられる——そんな思いをフィスタークは感じたのである。

だが、その笑顔が輝いていたのは、決してそれだけが理由ではない。友人とその破天荒な妹に会う事を、エルヴァストは心から楽しみにしてゐるのだった。



自室で風王と話していたティアは、来客の気配を察した。

「あれ？ エルさんが来たみたいね」

『はい。護衛と二人で來たようです』

『ビアンさんかあ。第二王子がよくそんな少人数で来られたなあ』  
変に感心してしまうティアに、風王が自ら集めた情報を伝える。

『本人はいつもの事だとか、気楽でいいとか申していましたよ。第一王子と言つても、あまり重要視されてはいないようですね』

「へへ……それを知つてもグレンないなんて、エルさんはなかなか見所があるね。お兄様にも見習わせなくちゃ」